



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



アキレス腱(アキレウス)

古代ギリシャでは生まれたばかりの赤ん坊を川で清める風習があり、川に身体を浸すことで頑健な肉体を手に入れることができると考えられていた。アキレス(アキレウス)も母の手によって身体を浸されたが、そのときアキレスを支えるため母はアキレスの両足首を持って浸したため、足首だけが浸かることなく、この部分だけは強くはならなかった。

長じてアキレスはトロイ戦争の英雄として活躍したが、足首が弱点であることを見抜かれ、足首に矢を射られて倒されてしまった。

ここからアキレス腱という言葉が生まれたのである。

「サモトラケのニケ」と「ナイキ」の関係

ルーブルの至宝「サモトラケのニケ」は150年ほど前にエーゲ海北東部に位置するサモトラケ島でフランス領事によって胴体部が発見された。勝利の女神「ニーケー」の彫像であり、その後翼や右腕など100以上の断片として発掘されている。

ナイキの社名は、この勝利の女神「ニーケー (Nike)」に由来している。また、ロゴマークの「スウ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

「スッシュ (Swoosh)」は、勝利の女神ニーケーの翼をモチーフにデザインし、躍動感を表現している。

なお、ナイキの前身であるBRS社は、創業者のフィル・ナイトがオニツカの高品質と低価格に感銘を受け、米国におけるオニツカタイガー(現アシックス)の販売代理店となり、その後、オニツカから技術者の引き抜きなどを行い、ナイキブランドを創設したものである。



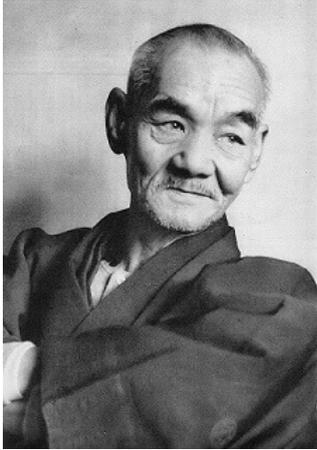
「やじ馬」

「やじ馬」とは「おやじ馬」が略されたものだ。「おやじ馬」は老いた馬のこと。つまり老いた馬はろくに仕事もできず、いつも若い馬の後について歩く。そこから何の役にも立たず、人のあとについて面白半分騒ぎ立てる人のことを「やじ馬」というようになったのである。

なお、「やじを飛ばす」の「やじ」は、「やじ馬」を略した言葉。

(蛇足ながら)「やじ」といえば、「ヤジ将軍」の異名を持つ三木武吉を思い出す。大正9年6月の議会で高橋是清大蔵大臣が海軍予算を説明中、「陸海軍共に難きを忍んで長期の計画と致し、陸軍は10年、海軍は8年の…」と言いかけたときに「ダルマは9年」とヤジった。これは、高橋のあだ名の「ダルマ」に、「達磨大師が、中国の少林寺で壁に向かって9年間座禅し、悟りを開いた」という面壁9年の故事をかけた機知に富んだものだった。議場は爆笑に包まれ、高橋是清も演説を中断して、ひな壇にいた原敬首相を振り返り、苦笑いした。普段から謹厳なことで知られる濱口雄幸までが議席で笑い声をあげたという。

・写真は三木武吉



姑息

本来「姑息」とは、一時のまにあわせ。その場のがれ(広辞苑)という意味である。「姑」は「しばらく」を意味し、「息」は休憩するという意味だ。つまり、「しばらくの間、息をついて休む」となる。ここから「その場しのぎ」となったわけだ。

しかし、姑息は誤用されて使われる場合が圧倒的に多い。すなわち、「卑怯」とか「ずるい」といった意味で使われている。以前、文化庁が行なった調査では本来の「一時しのぎ」で使う人が12.5%、「卑怯な」で使う人が69.8%もいたという(分からない他が17.7%)。

「蛇」はなぜ虫偏か

蝶、蝉、蠅などは昆虫類であり、漢字で書くと虫偏だが、爬虫類である蛇はなぜ虫偏なのだろう。実は、昔は「蛇」も虫に分類されていたのである。今では「虫」というと昆虫類を指すが、昔は鳥でも魚でもない小さな生き物は全て「虫」と分類していた。蛇が虫偏なのは、その当時の名残である。「蛙」「蛤」「蝦」などが虫偏なのも同様の理由からである。

蛇足ながら、クジラは哺乳類だが、昔は「魚」の一種と考えられていたため、「鯨」と魚偏がつく。旁(つくり)の「京」は「兆」の上の位で非常に大きいことを意味している。



被害を被るなど(重複表現について)

重複表現には「おかしい」と感じられやすいものと、そうでないものがある(と思う)。

例えば「馬から落馬・頭痛が痛い・食事を食べる・アメリカに渡米する」などは、おかしい重複表現例としてよく挙げられる。

では、「被害を被る・あとで後悔・いま現在・二度と再び」などはどうだろうか。だめという人と、かまわないという人とがいるだろう。判断が難しいところだ。

「歌を歌う・踊りを踊る・掛け声を掛ける・犯罪を犯す」などは、ほかの言い方を考えるのが難しいほど日本語としてなじんだ重複表現である。

書きことばの場合は、重複表現はなるべく避けるべきだろう。しかし、話し言葉の場合は、(冒頭の「馬から落馬」などを除けば)重複表現になったとしても許容範囲だと思う。